

1 「ツ」のような「シ」の正体

ずいぶん前のことですが、ある試験で、「椰子の実」の「椰子」の読みを出題したことがありました。採点し始めたA先生が「やつ」という誤答がいくつもあると言い出しました。それは妙だと思って覗いてみると、「ヤシ」と書いたと思われる「シ」が確かに「ツ」に見えます。

「これは「ヤシ」でいいでしょう」と私が言っても、A先生は「いや「ヤツ」に見えるからだめだ」と譲りません。そのうち、「カツ」「カシ」に見える答案も出てきました。「ヤツ」「カツ」という植物は知りませんが、「カシ」は存在するので、私も困りました。

これはどういうことでしょうか。おそらく、受験生は「ヤシ」と書いたつもりなのだと思います。ところが、採点者には、「シ」が「ツ」に見えたり、「ヤ」が「カ」と読めたりする。前章で述べたことに当てはめるなら、「ヤ」「シ」の字体に基づいて書かれた実現形（字形）が、別字である「カ」「ツ」に見えたということです。

「シ」についてやや詳しく見てみましょう。

「シ」と「ツ」の違い

上記のこと、すなわち、「ツ」のような「シ」が書かれることが特別なことではないことを証明するため、つい先日、大学生にカタカナとひらがなを書いてもらいました。

20人ほどの中で、「ツ」のように私には見える「シ」を書いた学生が2名いました。そのうちの一人のカタカナを以下に掲げます。いかがでしょう（「何秒で書けるか時間を計る」と言って書いてもらったので、下手くそになっています）。

アイエオ ハヒフヘホ
カキケコ コシムメモ
サツセソヤ エ ヨ
タツテトウリルロ
ニヌネノ ヲン

こうして見ると、「シ」と「ツ」とはずいぶん違っています。しかし、この学生がもしこの「シ」だけ書いていたら、私はやっぱり「ツ」みたいだと思ったに違いありません。上掲のような「シ」を、かたちがおかしい、「ツ」のように見えると感じた人は、どうしてそう感じたのでしょうか。

そもそも、「シ」と「ツ」とのかたちの違いはどこにあるのでしょうか、などと言うと、そんなことは見ればわかるじゃないか、見たとおりじゃないか、と言われそうなので、正直に私の考えを述べましょう。

ぜい肉落として丸くなる ひらがなの字体と丸文字

ここでは、ひらがなのかたちのしくみについて取り上げます。第2章では、カタカナが無駄の少ない引き締まった字体であるとお話ししました。ひらがなはどうでしょう。ひらがなは、私たち日本語使用者にとって、ベースになる基本的な文字ですが、かたちを思い浮かべてみると、ぐにゃぐにゃしていて複雑なようでもあります。しかし、表面上、複雑に見えても、それはあくまで実現形です。これまで見てきたように、実現形の背後にある字体の張り合い関係が極めて重要だと私は考えています。ここでも、字体、字形、書体に気をつけながら、ひらがなのかたちのしくみを解明していきたいと思います。

ひらがなの誕生

ひらがなも、カタカナと同じく漢字（働きは仮名、姿は漢字のいわゆる万葉仮名）から生まれました。カタカナとの違いは、カタカナが、基となった漢字の筆画の一部を残した（一部分で全体を代表した）ものであるのに対して、ひらがなは、原則として漢字一字全体を「崩した」ものであることです。漢字には、筆

画を滑らかに続けて書く草書という書体があります。中国から漢字が日本に入ってきたとき、すでに草書は成立していました。ひらがなは、この草書から生まれたと思われます。ですから、日本に入ってきた楷書の漢字が、日本で崩されてひらがなになったのではありません。

たとえば、右に挙げるのは、中国の孫過庭^{そんかたてい}「書譜」（687年、『書の宇宙 9』二玄社より）の「之不及」と書かれた箇所ですが、二番めの字は、どう見てもひらがなの「ふ」です。しかし、「書譜」は中国のもので、ひらがなが書かれるはずがありません。これはれっきとした漢字です。「書譜」やさらに溯って王羲之^{おうぎし}「十七帖」などには、ひらがなにそっくりのかたちの漢字がいくつも存在しています。これら（の原本）は、日本でひらがなが成立したとされる時期より前に書かれたものです。

もともと、草書という書体は、楷書が崩れて生まれたものではありません。草書は、楷書より古い隸書（一部は篆書）から生まれたとされ、楷書とはいわば兄弟に当たります。

日本と中国との交流が密になり、ある程度まとまって漢字が日本に入ってきた時代には、中国でも日本でも楷書が基本（真書）と意識されるようになっていきますから、楷書は正式な公的場面で用いられる書体であり、草書は私的なくだけた場面での書体と位置づけられることになります。楷書が徐々に「崩れて」ひらがなになったのではありませんが、書体の使い分けという点では、フォーマルでないという意味で「崩れて」に近い意識は当初からあったと言っていいでしょう。



9 「急」は足を伸ばし、汗を飛ばす 漢字字体の変化

カタカナは漢字を省略し、その一部から生まれました。つまり、多くのカタカナは、元々は漢字の部分です。しかし、カタカナが漢字から自立して、一つの文字のグループとして認められると、漢字からカタカナが生まれたことは忘れられ、「カタカナと同じ字体の漢字がある」とか、「カタカナを組み合わせることができる漢字がある」といったとらえ方がされるようになります。漢字の一部分だったカタカナは、漢字と点画を共有しています。かたちの上で、漢字とカタカナとを区別することはなかなか困難です。私たちはカタカナをマスターしているから混乱しませんが、かたちの上では、カタカナは画数の少ない漢字と言ってもいいくらいです。事実、いくつものカタカナが漢字と同じ字体、あるいは極めてよく似た字体です（漢字の書体によっては同じかたちをしています）。

カタカナ	エ、カ、タ、ト、ニ、ロ、オ、チ、ヌ、ハ、ヒ
漢字	工、力、夕、卜、二、口、才、千、又、八、匕

また、単体で字体となっていなくても、カタカナの多くが漢字の偏旁冠脚やそれより小さい部品と同字体です。

カタカナとカタカナの同字体の部品を持つ漢字の例

イ-伊、ウ-宇、オ-閉、ク-急、ケ-筆、サー-草、
シ-池、ソ-美、ナ-有、ヌ-綴、ネ-礼、ハ-貝、
ヒ-比、ホ-茶、マ-通、ム-牟、メ-希、ユ-候、
ヨ-雪、リ-帰、ワ-冗、キ-衛、ン-冷

漢字の中には、カタカナの組み合わせだけで出来ていると言えるものも数多くあります。

名←→タロ、加←→カロ、公←→ハム、只←→ロハ、
仏←→イム、多←→タタ、台←→ムロ、佐←→イナエ、
労←→ツワカ、花←→サイヒ、保←→イロホ……

「ノ、フ、コ」などは、さらに小さい部品あるいは基本点画と同字体ですし、「イ、シ、ネ、ン、ロ、サ、ウ、ワ」などは部首と同字体（ほぼ同字体）ですから、カタカナは漢字字体のほとんどの構成要素となっていると言えるでしょう。

小学校では、2年生までにカタカナを学びます。大多数の漢字より、漢字から生まれたものの方を先に学習するのです。ですから、漢字を学習するとき、カタカナを利用して不思議ではありません。たとえば、「人ベン」は、/人ベン/であると同時に/カタカナのイの字/でもあります。「ウ冠」「ワ冠」など、まさにそうした把握に基づく呼称です。「多」からカタカナの「タ」が生まれたのですが、カタカナの「タ」の字を縦に二つ並

「子ブタの貯金箱」の説明書を書いたのは誰だ

次に挙げるのは、子ブタの形をした貯金箱の使い方の説明書です。読んでみるとどうもおかしなことが書いてあります。どうしたのでしょうか。

これは『VOW2 現代下世話大全』（月刊宝島編集部編 1989）という一世を風靡した面白本で見つけました。「誤植」ネタとして投稿されたものです。他人の仕事の不備を笑いのネタにするのは不謹慎極まりないので、この「子ブ

小銭の音楽貯金箱

す楽しみのフットボール小豚型貯金箱歌を歌うご聞かせ、小銭を貯め込みます。

お知らせ

1. この音楽小銭貯金箱は硬貨を入る毎口美しいメロディーを奏ごます。
2. 仕切りから二本の小收じをなずし、仕切クを動かすと小銭を取ソ出すことが出来ます。
3. 若しバツテソーの電気が切水たら、ステイツカーを移し、バツテリ一を取り換えて下さい。
4. 二個のAG3バツテ一付き。

タ型音楽貯金箱」の説明書は、わかっていても噴き出してしまいます。ともかく、読んでみましょう。

まずタイトル「小銭の音楽貯金箱」、「銭」「楽」が旧字体になっています。古いからでしょうか？ それとも製造されたのが台湾・香港(?)だからでしょうか。

「す楽しみ」から解読開始

冒頭、いきなり「す楽しみ」。これは、「お楽しみ」でしょう。同様に、4行めの「ず知らせ」、これもどう考えても「お知らせ」です。なぜ、こんな間違いをしてしまったのでしょうか。

本書をここまでお読みくださった人なら、お気づきのことと思います。第4、5章で見てきたように、「す」と「お」とはかたちが似ているのです。ポップ体で説明してみましょう。

「す」の字体 = /ヨコ + 交差して + タテ + 続けて + ムスビ / とできますから、これは、点のない「お」(「お」)です。明朝体「す」、[お] や、教科書体「す」、[お] では、両者の字形は大きく異なっていますが、潜在的には、点の有無で両者は区別可能です。すなわち、点のないのが「す」で、点1個が「お」、点2個なら「ず」です。

もし、活字を組む際に渡された原稿の「お楽しみ」「お知らせ」の「お」が丸文字っぽかったなら、活字を探すとき、「お」をよく似た「す」「ず」に間違ってしまったということが起きるかもしれません。「お」と「す」の潜在的な字体の近さが、証明されたような気がして愉快です。

しかし、実際にはそんなことはまずあり得ません。「す楽しみ」「ず知らせ」なんて語は存在しないのですから。「お」だか「す」だか見分けがつかないような字が書いてあっても、「お楽